

## 外交実務研修員としての勤務を通じて

平成29年10月  
外交実務研修員 吉田 一穂  
(東京都から派遣)

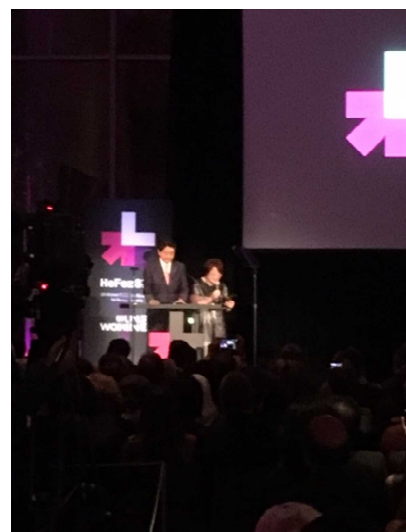
### 1 はじめに

私は、平成28年4月から、外交実務研修員として外務省にて勤務しております。派遣元の東京都では、港湾や都市整備、防災等に携わっており、国際的な業務に携わる機会は多くありませんでしたが、外務省員の皆様のご支援を得ながら、激変する国際情勢を目の当たりにしつつ、日々の業務に携わっているところです。私は執筆日現在で外務省勤務が1年半を迎えるところですが、未だに新たな発見が絶えません。今回は、私がこれまでに経験した業務と感じたことについて、簡単にご紹介いたします。

### 2 女性参画推進室における業務

派遣一年目となる平成28年度は、総合外交政策局女性参画推進室にて勤務しました。女性参画推進室は、平成26年に新設された比較的新しい部署で、女性の参画推進に関する外交課題について政策の企画・調整を行い、外交政策に幅広くジェンダーの視点を反映させることを目的として設置されました。その中で、私は UN WOMEN (United Nations Entity for Gender Equality and the Empowerment of Women)という、国連においてジェンダー平等や女性の社会参画等を所管する組織との調整業務の他、女性の活躍推進に関する省内外との調整や国際女性会議WAW!の実施等に携わりました。

特に印象に残っているのが、9月下旬に国連総会ハイレベルウィークに合わせてNYで実施されたUN WOMEN主催行事に関する業務です。この行事は、UN WOMENが推進するHeForShe(ジェンダー平等のために男性・男児の協力を求めるキャンペーン)の2周年を記念して実施されたもので、同キャンペーンの主要支持者である安倍総理大臣を含む複数国の首脳やUN WOMENの親善大使である女優のエマ・ワトソン氏なども出席する注目度の高い行事で、我が国の「女性が輝く社会」に向けた取組を世界に発信する絶好の機会でした。調整は、行事直前まで実施され、最後まで気が抜けない業務でしたが、多くの関係者の協力の下、無事に総理のスピーチが完了した際には、安堵すると同時に、外交の最前線にいる外務省員の皆様のチームワーク・現場力に感銘を受けたところです。



総理スピーチの様子

### 3 南東アジア第二課における業務

平成29年度からは、南部アジア部南東アジア第二課にて勤務しています。南東アジア第二課は、近年経済成長が著しいインドネシア、フィリピン、マレーシアをはじめ、シンガポール、東ティモール、ブルネイと、政治・経済関係はもとより、地政学的にも我が国にとって大切なパートナーである国々との外交政策を所管する課です。その中で、私はインドネシアとの人物交流や、来年2018年に迎える日本インドネシア国交樹立60周年に係る記念事業の準備等に携わっています。

インドネシアは、人口約2.55億人を擁し、約300の民族から成るASEANの中核国です。我が国とは伝統的に友好関係を築いており、人口の約7割が親日的であるとも言われます。また、人口の約9割がイスラム教徒で、世界最大のムスリム人口を抱える国という側面もありますが、彼らは概して穏健なムスリムであると言われ、他宗教にも寛容です。その成長ポテンシャルは企業にも高く評価されており、本年8月に実施された日本インドネシア国交樹立60周年事業実行委員会の立ち上げ会合においては、我が国を代表する企業や地方自治体、法人等が数多く集い、その期待度の高さと、我が国とインドネシアのパートナーシップの重要性の一端を目の当たりにし、身の引き締まる思いでした。

また、インドネシアの新聞記者の招へいを担当した際には、多くの関係者の協力を得て我が国の様々な魅力に触れてもらうプログラムを企画し、結果としてインドネシアの有力紙に一週間にわたり「Sepekan Berkeliling Negeri Sakura(桜の国をめぐる一週間)」と題された特集が掲載されました。我が国の政治や文化、教育など多岐にわたる記事がインドネシアに発信される一助となれたことは、私にとって得がたい経験でした。



特集記事の一部 私も写っています

### 4 おわりに

外交実務研修員は、2年間の外務本省での勤務を終えると、在外公館で約2年の勤務経験を積みます。東京都はジャカルタ特別州との姉妹都市関係に鑑み、伝統的に多くの職員をインドネシアに派遣しており、私も在インドネシア日本大使館における勤務に向け、日々英語・インドネシア語能力の習得・向上に努めています。しかし、業務の中で実感するのは、そうした語学力以上に、相手文化の理解や常日頃のコミュニケーションが外交に果たす役割の重要性であり、日々周囲の省員の皆様から学んでいるところです。

私が外務省での勤務を終え、東京都に戻るのは2020年、東京オリンピック・パラリンピックが開催される年です。東京都が世界の注目を集めるこの機会に、微力ながら貢献できるよう、今後も日々の業務に励みつつ、外交感覚を養っていきたいと思います。